

母語教室における保護者参加の取り組み

澤根容子(特定非営利活動法人 浜松外国人子ども教育支援協会)

浜松市では、2002年から母語教育を行ってきた。当時、外国人の子供たちの不就学、不登校対策として「カナリーニョ教室」が設置され、その事業内容の一つに母語教育(ポルトガル語)があった。その後、教育委員会に事業を移し、2007年から現在まで母語支援事業(ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語)を行っている。当団体は、開始年度から現在に至るまでの18年間、事業を受託している。当初は帰国後の復学を見据えた「母語」保持を主たる目的としていたが、定住、永住化が進み、更に近年は日本生まれの子供が増加していることから「母語」から「継承語」教育としての位置づけに変化しつつある。

この母語教室は浜松市内の市立小中学校に在籍する外国人児童が対象で、通級型である。言語ごとに3カ所の協働センターで、年間27回(ポルトガル語は32回)、土曜日に2時間(ポルトガル語は1.5時間)開催している。現在、計201名(ポルトガル語140名、スペイン語29名、ベトナム語32名)が通級している。指導員はブラジル人が3名、ペルー人が2名、ベトナム人が2名で、母語と日本語のバイリンガルである。クラスはポルトガル語が9クラス、スペイン語が2クラス、ベトナム語が4クラスあり、レベル別に分けられている。母語教育は全人的教育であると捉え、「母語指導」「母国文化に触れる活動」に加え「家庭での母語教育の啓発」にも重点を置いている。全ての教室で開講式と閉講式を行い、保護者に参加を促したり、各教室で保護者も一緒にイベント授業を企画、実施したりしている。子供たちが母語を使用するのは主に家庭であること、年間の授業回数が限られていることから、母語の力を伸ばすには保護者の協力が不可欠である。本発表では、昨年度の保護者参加の実践活動を紹介する。

【ベトナム語教室】10月にベトナムの伝統的な遊び体験授業を実施した。会場の体育館を借りて4種類の遊び(「Ô ăn quan」「Banh dūa」「Giụt cờ」「Rồng rắn lén mây」)を楽しんだ。子供22名、保護者15名が参加した。子供たちは遊びを通して母国の文化を学んだと同時に、保護者が積極的に関わったことで、親子の触れ合いの機会となるとともに、同じ文化を背景に持つ人同士が交流を深める場ともなった。

【スペイン語教室】12月に地元企業ヤマハ株式会社の「楽器作りワークショップ『つくろう、ならそう!』」を開催した。段ボールで世界に唯一のギターを作り、音の鳴る仕組みを学ぶ体験型講座である。子供15名(兄弟含む)、保護者15名が参加した。子供は日本語の説明を聞きながら、保護者とは母語を使って会話をしていた。日本語と母語を自然に使い分けられる子供の素晴らしい力を実感した。保護者も我が子の頼もしさを感じたことだろう。また、地元企業の方に母語教室を知つてもらう機会になり、多文化共生を考えるきっかけの一つになったと感じた。

【ポルトガル語】3月に閉講式での参加者全員によるブラジル国歌斎唱と子供たちによる浜松市歌(ポルトガル語訳)合唱をした。子供128名、保護者100名以上が参加した。浜松市歌(ポルトガル語)は、指導員の一人が子供たちの未来への想いと浜松市への感謝の意を表した詞を乗せたものであり、合唱は閉講式の恒例となっている。母国の誇りと浜松市への想いが歌に表れた圧巻の光景だった。

母語教室に子供を入級させたのは保護者の意思である。しかし、通級させるだけでは母語の成長を押し上げることは難しい。保護者が母語教室に直接関わる場を設けることで、家庭でも教育する意識が醸成される。「母語教室と家庭の協同」こそが肝心である。

参考文献

- 中島和子(2016)『完全改訂版バイリンガル教育の方法-12歳までに親と教師ができる』アルク
中島和子(2010)『マルチリンガル教育への招待-言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房
松田陽子・野津隆志・落合知子編(2017)『多文化児童の未来をひらく-国内外の母語教育支援の現場から』学術研究出版

真嶋潤子編著(2019)『母語をなくさない日本語教育は可能か-定住二世児の二言語能力』大阪大学
出版会
近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編(2019)『親と子をつなぐ継承語教育-日本・外国にルーツを
持つ子ども』くろしお出版
西川朋美(2022)『外国につながる子どもの日本語教育』くろしお出版